



ショートコメント

★★★

Data 2022-18

監督・撮影・音響：ジャンフ
ランコ・ロージ

国境の夜想曲

2020年/イタリア・フランス・ドイツ合作映画
配給：ピターズ・エンド/104分

2022 (令和4) 年2月17日鑑賞

テアトル梅田

👁️👁️ みどころ

ジャンフランコ・ロージ監督はドキュメンタリー映画の巨匠。アフリカ大陸のエリトリアで生まれ、イタリア、トルコ、米国の暮らしの中で「いつもよそ者だった」という彼は、58歳の今「映画を撮影している場所が私の故郷」と語る境地に！

本作の“国境”はアメリカとメキシコの国境ではなく、イラク、シリア、レバノン等の国境だから、今日の問題が満載。監督だけでなく、撮影や音響も一人で担当し、現地の人々の言葉に耳を傾け続ける彼の作風に注目！

各界の著名人は本作を絶賛しているが、残念ながら私には“面白さ”が感じられないため、星3つ。しかし、それでも本作は必見！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆「ドキュメンタリー映画の巨匠」と呼ばれている、ジャンフランコ・ロージ監督の作品を、私は『ローマ環状線、めぐりゆく人生たち』（『シネマ33』未掲載）、『海は燃えている～イタリア最南端の小さな島～』（『シネマ39』未掲載）で観ている。前者は2013年のヴェネチア国際映画祭・金熊賞、後者は2016年のベルリン国際映画祭・金熊賞等の受賞作だが、いずれも私の評価は星3つ。なぜそんなに評価が低いのかというと、要するに“面白くない”からだ。

しかし、同監督の最新作たる本作のチラシを見ると、各界の著名人が絶賛している。しかも、本作はジャンフランコ・ロージが監督だけでなく、3年以上の歳月をかけて、イラク、シリア、レバノン、クルディスタン等の国境地帯で撮影したそうだから、今日の問題点が凝縮されている、はず。すると、こりや必見！

◆通常のようなインタビューやナレーション、テロップなどを一切使わず、その場で暮らす人々や風景の中にカメラを構えて話を聞き、また静かに彼らを見つめるのが、ジャンフランコ・ロージ監督がドキュメンタリー映画を作る手法。それが本作でも徹底されている

から、説明は全くない。そのうえ、『国境の夜想曲』というタイトルながら、具体的な地名が全く明示されないし、登場する人物の特定もないから、要するにわかりにくい。

何の説明もなく、本作で順番に描かれるのは、①戦争で失った息子を思い哀悼歌を歌う母親、②ISIS（イスラム国）の侵略により癒えることのない痛みを抱えた子供たち、③政治風刺劇を演じる精神病院の患者たち、④シリアに連れ去られた娘からの音声メッセージの声を何度も聞き続ける母親、⑤夜も明けぬうちから家族の生活のため、草原に猟師をガイドする少年。

スクリーン上に映し出されるそれらの“ストーリー”のアピール力の大きさはよくわかるが、やっぱり私にはイマイチ・・・。

◆新聞紙評によれば、ジャンフランコ・ロージ監督は撮影や音響も独りで担当したうえ、これまでと同様、カメラを持たず長く現地に滞在し、偶然出会った人たちの言葉に耳を傾けたそうだ。また、彼は「質問すると彼らは答えなければならなくなる。脚本も書かない。なぜならそこから嘘が始まるから。」と考えているから、その手法を徹底させている。そのため、彼の持論は「ドキュメンタリーとフィクションに違いはない。映画というだけだ。」ということだ。

また、彼は58歳の今、「映画を撮影している場所が私の故郷」と言う境地に達している、と書かれている。たしかに、それは本作から十分理解できるが、私にはやっぱり・・・。

2022（令和4）年2月22日記